

開催地名	青森県 八戸市
開催日時	令和7年2月2日(日)13:30~15:00
開催場所	津波防災センター
語り部	伊藤 正治(岩手県大槌町)
参加者	94名 八戸圏域8市町村民(八戸市、三戸町、五戸町、田子町、南部町、階上町、新郷村、おいらせ町)
開催経緯	東日本大震災から今年で14年を迎える中、この震災を知らない世代が多くなり、時の経過とともに被災した当時の記憶が薄れていくことを懸念しており、防災に対する意識を向上させ、災害への備えを進めるうえでも、当時の記憶を後世に伝えていくことが重要と考えたため。
内容	<p>■はじめに</p> <p>1. 自己紹介 講演者の伊藤正治氏は、岩手県大槌町で長年暮らし、防災活動に携わってきた。東日本大震災の経験を踏まえ、津波防災の重要性を伝える活動を続けており、震災を通じて得た教訓や防災の在り方について語っている。</p> <p>大槌町はリアス式海岸に位置し、過去にも度々津波の被害を受けてきた地域である。町の中心部には住宅や商業施設が集まる一方、海に近い低地には漁業関係者の住居が多く、津波の影響を受けやすい環境にあった。しかし、震災前には住民の防災意識が十分に高まっていたとは言えず、避難の遅れが被害を拡大させる一因となった。</p> <p>■あの日のこと(東日本大震災の経験)</p> <p>1. 震災発生と避難の状況 2011年3月11日、東日本大震災が発生し、大槌町に壊滅的な被害をもたらした。地震発生直後、多くの住民が高台へ避難したが、一部の人々は「大丈夫だろう」と考えて自宅へ戻り、結果的に津波の犠牲となった。</p> <p>2. 役場の被害と行政の機能停止 伊藤氏は当時、町の役場に勤務しており、地震の揺れの直後に庁舎の屋上へ避難した。しかし、津波は2階部分まで押し寄せ、建物を破壊し、多くの職員が命を落とした。その結果、町の行政機能は一時的に麻痺し、情報発信や支援物資の手配が滞る事態となった。伊藤氏自身も津波に巻き込まれながら、何とか生き延びることができたという。</p> <p>3. 津波の影響と火災の発生 津波は何度も町を襲い、避難が遅れた人々の多くが命を落とした。さらに、津波による火災が発生し、プロパンガスの爆発などが被害を拡大させた。町の広範囲が瓦礫と化し、多くの住民が家族の行方を捜しながら途方に暮れていた。</p> <p>■その後のこと(防災対策の強化と取り組み)</p> <p>1. 避難所の運営と課題 震災直後、町は混乱状態に陥った。避難所は設置されたものの、十分な物資が届かず、特に水や食料、トイレの不足が深刻な問題となった。衛生環境の悪化も懸念され、感染症の発生が危惧された。</p> <p>また、一度避難したものの、自宅へ戻ってしまい津波に巻き込まれた住民も多数いた。この経験を踏まえ、「一度避難したら決して戻らない」という意識を住民の間で徹底する必要性が強調されるようになった。</p> <p>2. 支援物資のミスマッチ問題 震災後、全国から多くの支援物資が届いたが、被災者のニーズと合致しないミスマッチも発生した。例えば、すぐに必要な食料や衣類が不足していた一方で、長期的に使用する物資が先に届くケースがあった。この経験から、災害時の物資管理と適切な分配の重要性が再認識された。</p> <p>3. 行政機能の復旧と支援の必要性 町役場では、多くの職員が犠牲となったため、行政機能の復旧に時間を要した。そのため、外部から派遣職員やボランティアの協力を得ながら復興作業が進められた。しかし、情報共有の不足や住民との意思疎通の難しさが課題として浮き彫りになった。</p>

■まとめ(今後の防災対策と意識向上)

伊藤氏は震災の経験を踏まえ、今後の防災対策として以下の点を強調した。

1. 避難の徹底

津波災害では、津波の高さや到達時間を正確に予測することが困難なため、「とにかく早く避難する」ことが最優先となる。「大丈夫だろう」という思い込みを排除し、迅速に行動する意識が必要である。

2. 避難所の環境整備

避難所の運営では、物資の備蓄だけでなく、健康管理や衛生環境の維持が極めて重要である。特にトイレや医療の確保が課題となるため、事前に十分な準備を整える必要がある。

3. 防災情報の周知と住民意識の向上

震災前にはハザードマップが作成されていたにもかかわらず、多くの住民が確認しておらず、リスクを十分に理解していなかった。災害時に適切な判断を下すためには、日頃から防災教育を行い、地域全体で情報を共有することが求められる。

4. 地域の連携と防災計画への住民参加

震災後、多くの地域が外部の支援を受けながら復興を進めてきたが、住民の意見が十分に反映されないケースもあった。防災計画や避難訓練の策定には、行政だけでなく住民自身が積極的に関わることが必要である。

5. 「自分の命は自分で守る」という意識の徹底

伊藤氏は、「防災は他人事ではなく、自分事として捉えることが大切だ」と述べた。災害はいつ、どこで発生するかわからないため、一人ひとりが「自分の命は自分で守る」意識を持ち、日頃から備えておくことが最も重要である。

震災の経験を教訓とし、未来の防災対策に生かしていくことが、今を生きる私たちの責任である。



開催地より

実体験に基づく、発災直後の災害対応や避難行動をするうえでの課題についてや「自助」「共助」「近助」など防災対策の基本となる考えについて御講演頂いた。今後も、防災意識向上のための震災伝承や写真展の実施、地区の防災訓練など継続して行っていきたい。